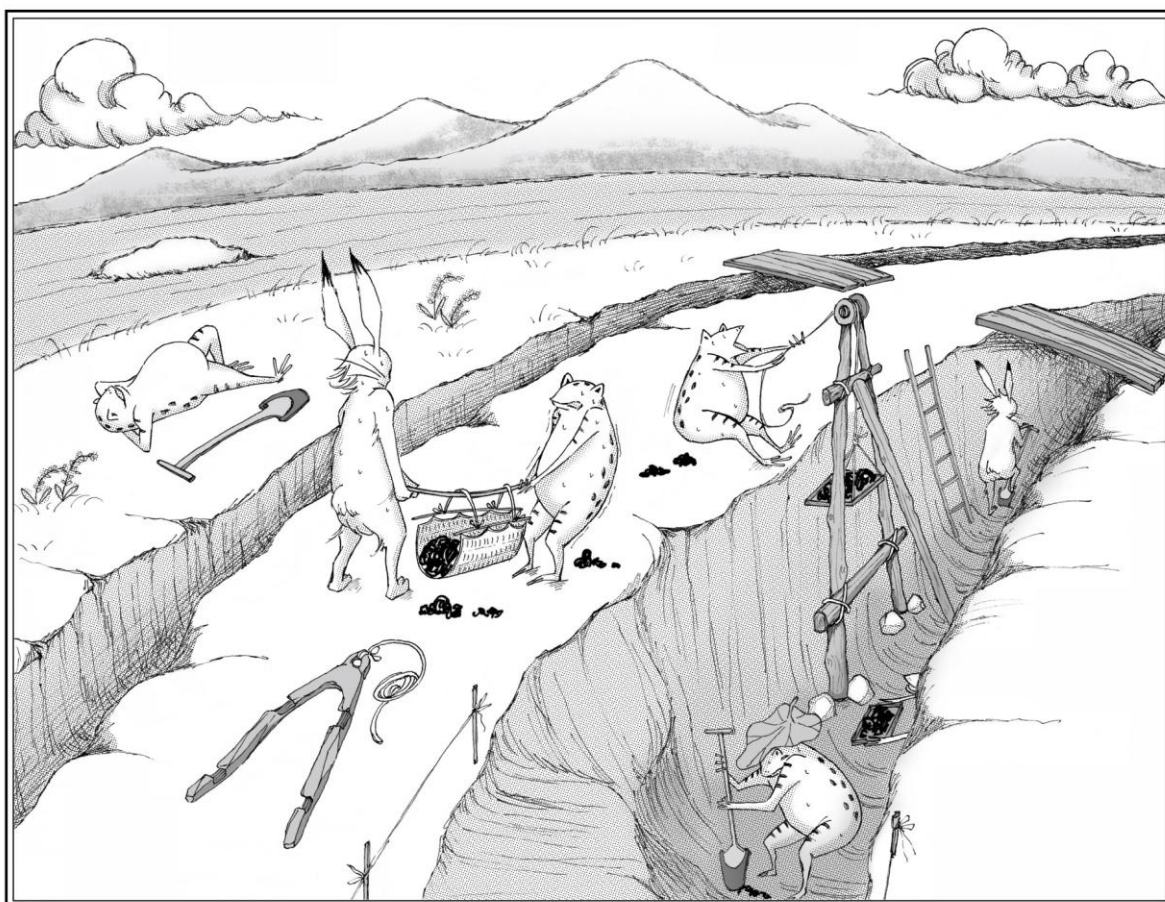


や な ぎ の ご し ょ い せ き

柳之御所遺跡

—— 第72次発掘調査 ——



※堀を掘っている様子を想像して描いてみました

日時:平成22年9月11日(土) 午後1時～

場所:柳之御所遺跡

岩手県教育委員会

調査要項

調査期間	平成 22 年 5 月 10 日～9 月 30 日（予定）
調査目的	遺跡整備調査事業に関わる内容確認調査
調査回数	第 72 次
調査面積	約 1、500 m ² （合計）
調査機関	岩手県教育委員会 平泉遺跡群調査事務所
協力機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
調査担当者	岩渕 計 半澤武彦 村田淳 櫻井友梓
表紙イラスト	丸山聡子

はじめに

柳之御所遺跡は、高館の南東、北上川西岸と猫間が淵に挟まれた標高約 25mに立地し、約 11 万平方メートルという広大な面積を有する遺跡です。

当遺跡は奥州藤原氏の初代清衡、二代基衡の居館あるいは義経の居所と伝承されてきた遺跡ですが、北上川による浸食のために大部分が流失していると考えられていました。ところが昭和 63 年(1988)から行われた緊急発掘調査により、12 世紀後半を中心とする奥州藤原氏に関連する遺構・遺物が大量に発見され、古代から中世へと日本の歴史が大きく変わる時代の様子を伝える全国的にも数少ない遺跡として、平成 9 年(1997)に国の史跡に指定されています。また、来年度の世界遺産登録を目指している「平泉の文化遺産」を構成する資産の一つとなっています。

現在までの調査結果から、柳之御所遺跡は鎌倉幕府によってつくられた歴史書『吾妻鏡』に見える「平泉館」と考えられており、岩手県では、柳之御所遺跡が学びの場として広く活用されることを願い、史跡公園として整備する予定で、今年度から工事を開始しています。その準備のために、平成 10 年(1998)より岩手県教育委員会が主体となって遺跡の内容を確認するための発掘調査を実施しています。史跡公園は今年度 4 月に開園し、多くの方にご来園いただいているところですが、整備は今後も継続して行い、より充実したものとしていく所存です。

今年度の第 72 次調査は、遺跡堀内部地区とよぶ堀に囲まれた範囲の北端部分にあたります。この範囲はこれまで一部の試掘調査や現在の地形の観察から、堀跡が延びることや建物跡の存在が推定されていましたが、本格的な発掘調査は行われておりませんでした。そこで今回は以下の 2 つを主な目的に発掘調査を行うこととしました。

- ①堀跡の延長を確認し、その構造を把握すること
- ②遺跡北端部における遺構の分布状況を確認し、柳之御所遺跡の全体の様相を把握する資料を得ること

今年度調査区は、今後の柳之御所遺跡整備における重要な地区であり、当説明会がこれからの文化財保護及び「平泉の文化遺産」理解の一助になれば幸いです。

1. 調査成果

今年度の調査範囲は遺跡の中心部を囲う堀跡とその内側の部分になります。これまで一部の調査や現在の地形の観察から、堀跡と建物跡の存在が推定されていました。

調査範囲は、高低差があり、堀跡が分布する範囲と柱穴等が分布する範囲とにわかれます。調査の結果、堀跡のある範囲は、過去に大きく地形が改変されたことがわかりました。検出している遺構は以下のとおりです。

- 堀跡 2 条
- 掘立柱建物跡 1 棟
 - 柱列 2 条
 - 柱穴約 200 個
 - 井戸跡 1 基

次に主な遺構の内容を紹介します。

堀跡

堀跡は 2 条確認しています。外側の堀は上幅が約 3～4 m ほど、深さは深いところでも約 1 m ほどです。周囲の状況から、上部を大きく削られており、当時の規模は現在より大きかったと考えています。堆積土の様相から、この堀跡は数回の掘り直しが行われたとみられます。また、遺物も多く出土しています。

内側の堀は上幅約 11～12m ほど、深さが約 3 m ほどと、大規模なものです。この堀跡も上部が削られたため、当時はより大きな堀だったと考えています。堆積土の上部は近世の厚い盛土があり、近世段階まで堀跡部分はいくぼんでいたとみられます。この堀跡の埋まり方の多くは自然に堆積したものです。

2 つの堀跡の新旧関係は、今回の調査範囲では不明ですが、規模や埋まり方など違いが多く、出土した遺物とともに検討していきたいと考えています。また、過去の調査で見ついている堀跡との関係を、来年度以降に予定している隣接地点の調査などで明らかにしていきたいと考えています。

掘立柱建物跡

1 棟確認しています。南北に長い 4 × 3 間の^{にめんびきし}二面庇建物で、身舎が 3 × 2 間、庇は南側と西側につけられています。柱穴の間隔は約 2.4m（1 尺を約 30.3 cm とすると 8 尺等間）で、規模は南北約 10m、東西約 7.5m となります。柱穴の直径は約 80～95 cm、深さは 20～40 cm で、中央には直径約 25 cm の柱の痕跡も確認されています。柱穴の規模は、これまで柳之御所遺跡で見ついている掘立柱建物のなかでも比較的大きなものです。

なお、柱穴の掘り方から少量のかわらけ片が出土しているのみであり、建物が建てられ

た年代については、12世紀のいつごろなのか特定できていません。

柱 列

柱穴が直線的に並んでいるものを柱列としました。南北方向に延びる2列を確認しています。

柱列①は8個の柱穴が並んだもので、全長約16m（柱穴の間隔1.7～2.5m）です。柱穴の直径は約70cm、深さは30～40cmです。柱穴が2個切りあっているものがいくつかみられることから、ほとんど同じ場所で作り替えが行われていた可能性があります。

柱列②は7個の柱穴が並んだもので、全長約14m（柱穴の間隔約2.1～2.5m）です。柱穴の直径は約40cm、深さ20～30cmと柱列①より若干規模は小さくなります。いずれの柱穴でも掘立柱建物跡の柱穴のような柱の痕跡は確認されていません。

なお、2列の柱列は平行していますが、時期は特定できませんでした。また柱列①・②とも掘立柱建物跡と一部が重複していますが、柱穴同士が重なっているものがなく、どちらが先につくられたかは不明です。

2. 出土遺物

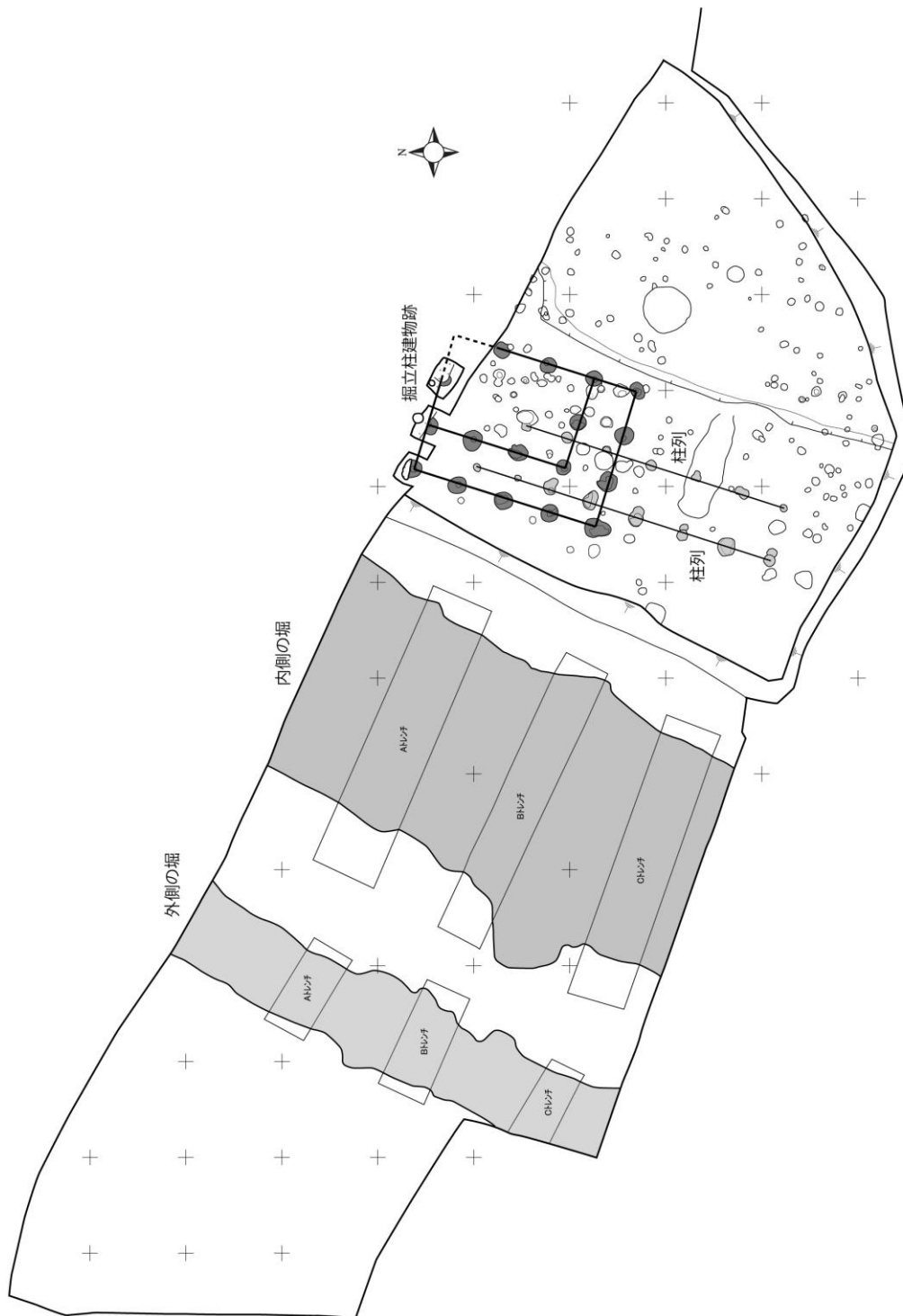
今回の調査ではコンテナ10箱の土器などが出土しています。かわらけと呼ばれる素焼きのものが多くですが、中国産の陶磁器や国産の陶器なども出土しています。そのほか、木片類が多数ありますが、製品を特定できるものは少ないです。

今回出土した遺物の多くは堀跡から出土していますが、他の調査時と比べると出土量は多くありません。

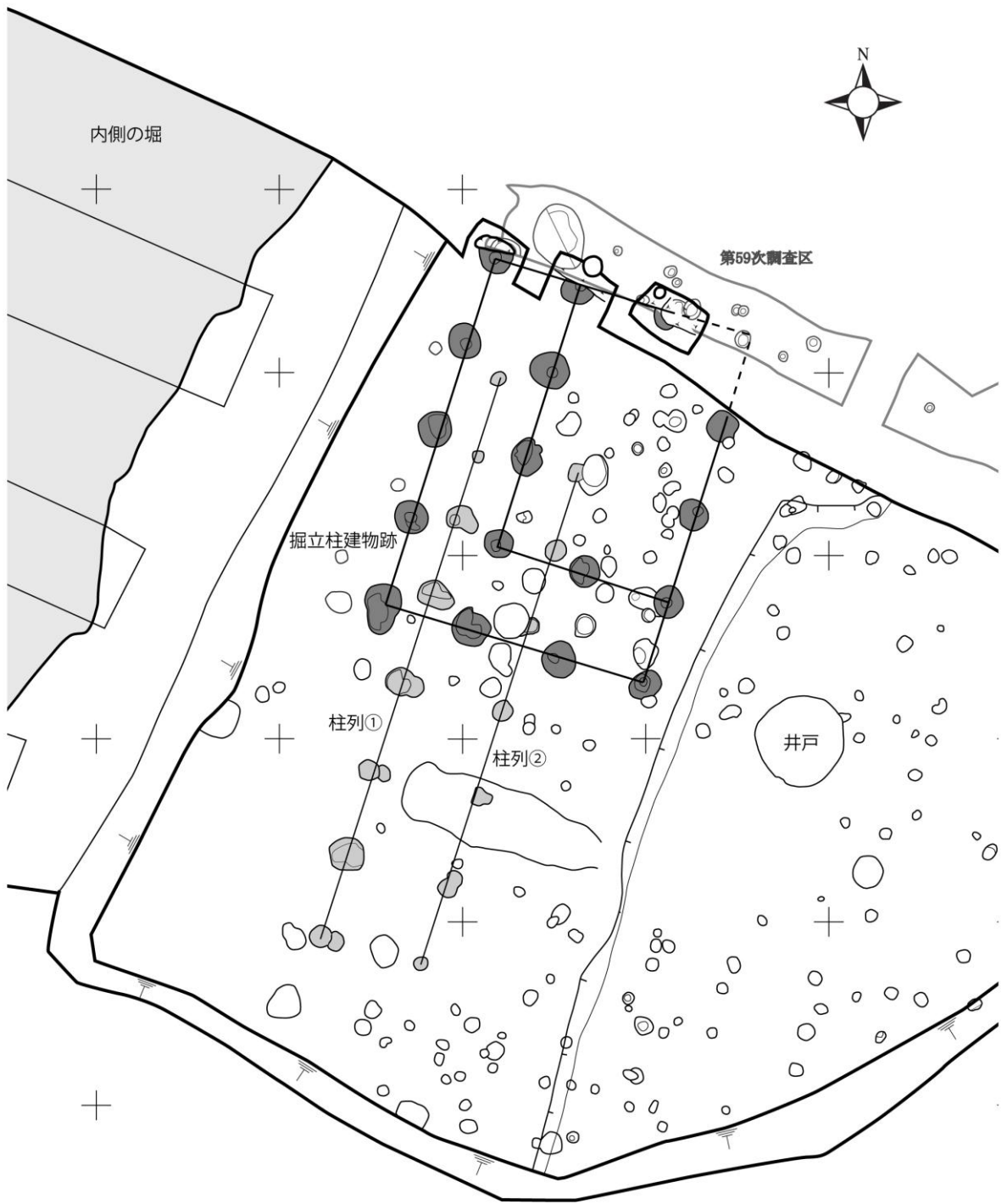
3. まとめ

今年度の調査は、これまで未調査であった範囲が多かったこともあり、上記のような多くの成果を挙げることができました。特に、遺跡中心部の北端部分でも、平行に走る2条の堀跡を確認したことは大きな成果です。また、遺跡の堀に囲まれた北側の部分にも建物が存在したことは、柳之御所遺跡全体の構成を考える上で重要な手がかりとなりました。今後、今回の調査成果を検討し、遺跡全体の姿を明らかにするとともに、現在も進めている整備事業に活かしていきたいと考えています。

来年度以降も調査は継続しますので、今後ともご協力をお願いいたします。



北側調査区遺構配置図① (1/300)



北側調査区遺構配置図②(1/150)



The excavation of Yanaginogosho site